

2024年9月22日（聖霊降臨後第18主日、特定20、B年）

牧師メッセージ

「偉くなりたいなら」

（マルコによる福音書9:30-37）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音で、イエスは弟子たちに二度目の受難予告をしました。しかし、それを聞いた弟子たちは理解できないばかりか、怖くて尋ねることもできませんでした。それどころか、すぐに心離れた彼らは、誰が一番偉いかと論じはじめたのです。ご受難へと向かっていく主イエスと、人間的思いに囚われた弟子たちのコントラストに、悲しみすら感じます。弟子たちに囲まれながらも、イエスの十字架への歩みは孤独です。

しかしこのような弟子たちであっても、イエスは決して見捨てることはありません。歩みを止め、そこに座り込み、弟子たちを呼び集め、教え、導かれます。イエスの深い愛がここに表されています。理解のない弟子たちに対し、どこまでも寛容に、導くことを諦めないのです。そしてイエスは、「一番先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕えるものになりなさい」と言いました。そして子どもを真ん中に呼び、抱き上げます。

自分が偉くなりたいと威勢を誇示すると、力弱い存在は見えなくなります。そしてそれでは、自ら弱き者となって十字架に向かうイエスのことを見失ってしまうこととなります。イエスを見失ってしまうなら、イエスによって示される神のみ心を見失うこととなります。つまり、子どもを見失っていることは、神のみ心を見失っていることと同じなのです。だからこそ、イエスは子どもを真ん中にし、弟子たちが大切なものを見失っていることに気付かせたのです。

翻って、わたしたちの世界は、教会はどうでしょうか。小さく力弱い存在への目が失われているならば、わたしたちはイエスの姿を見失っています。わたしたちはいつも十字架を見つめ続けなければなりません。十字架の前に立つとき、わたしたちの目線は自然と低みから見上げることとなります。十字架の前に立つとき、わたしたちは自らを低くされるのです。その低みに立つてこそ、わたしたちは弱くされた存在を見る目が与えられ、イエスを通して示された神のみ心を知ることができるのです。

イエスは、わたしたちが無理解であったとしても、歩みを止め、腰を下ろして語りかけてくださいます。そして最後は自らの十字架上での姿によって、わたしたちが立つべき位置、持つべき視座を教えてください。わたしたちの視点はいつも子どもの目線、低みからでなければなりません。十字架上のイエスを見つめ、その言葉に耳を傾け、「子ども」への目を与えられて歩んでいくことができますように。